
老人かロボット。

奥田徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

老人がロボット。

【Nコード】

N8219Z

【作者名】

奥田徹

【あらすじ】

引き籠りの少年はお婆ちゃんと二人暮らし。少年は毎日ロボットを作り続けていた。気が付けば三十年が過ぎていた…。

十五歳の時から登校拒否が始まり、三十年が過ぎていた。

彼はお婆ちゃん二人暮しで、ひたすら可愛がられた。

「学校に行きたくない」

と言う彼に、お婆ちゃんは

「行きたくないなら行かなくていいよ」と言い、以来二人でほとんど家を出る事無く暮らしてきた。

田舎の隅の小さな一軒家で、野菜や肉等の食べ物、町のスーパーから宅配で運んでもらい、たまに人気が少ない夜道を二人で散歩した。暗がりの夜道は楽しく、二人を開放的な気分させた。

「星がいっぱいあるね」

彼がそう言うとお婆ちゃんは星座の話聞かせてくれた。夏場は鈴虫が鳴き、冬は蛍が光った。

流れ星を発見する度、

「あれに乗りたい」と彼はお婆ちゃんにせがんだ。

ここ四、五年はお婆ちゃんが足を痛め、散歩の回数が減り、身の回りの世話は彼がこなしていた。

彼は拾った漫画の影響から家の中ではいつもロボットを作っていた。

家から二キロ程歩いた所に、不法投棄された電化製品やら、壊れた

車等、沢山のゴミが捨てられていて、そこから適当な鉄屑を拾ってきては、ロボットの材料にしていた。

初めは、それこそ形だけのロボットで、動きもしない、ただの鉄の塊に名前をつけて楽しんでた。

「僕とお婆ちゃんの言う事しか聞かないんだよ。」

「あら、じゃあ、話が出るのかい？」

「いや、…これから！」

それから彼は何年もかけ、音声認識機能を独学で作り上げた。

「何か話してみて」

「じゃあ…ゴミを捨ててきてちょうだい」

「ダメだよ。お願いじゃなくて、お話だよ」

「あら、動かないのかい？」

彼は再び何年もかけ、ロボットに二足歩行や、手の動き等の機能を独自に開発した。

「しかし、ロボットなんか作ってどうするの？」

そう言われて彼も一瞬戸惑った。

「…きつと友達が欲しいんだ…」

「そうだったのかい…じゃあ、二人で出かけるといいよ。遊んで来な」

「ダメだよ。ロボットと歩いてたら笑われるよ」

「あら、友達なのにな？」

彼はせめて二人で歩いてても笑われないようにロボットの更なる開発を進め、人工皮膚やら、重量軽減に取り組み、一見人間に見える様に改造を試みたが、凝れば凝る程時間は過ぎて行き、

気が付けば三十年が過ぎていたのだ。

少年だった彼は立派な中年になり、お婆ちゃんは百歳を超えた。

ある日お婆ちゃんは、彼を呼び寄せ、

「ロボットは出来たかい？」

「いや、まだ人間には見えないんだ。」

「ねえ、一つ聞きたいんだけどね。」

「ん？」

「お婆ちゃんと過ごして、毎日が退屈じゃなかったかい？」

「そんな事ないよ。楽しいよ。また足が治ったら散歩に行こうよ。」

「うん。ありがとう。私も幸せだよ。誰が何と言おうと。」

次の日の朝、お婆ちゃんは目を覚まさなかった。

彼は途方に暮れ、どうして良いか解らずにいた。

「お婆ちゃんが死んだよ。」

彼がロボットに話し掛けると、

「死ぬって何？」とロボットが聞いた。

「動かなくなっても目を覚まさないんだ。」

「それなら君が直せば良い。いつも僕にしてくれるように。」

ロボットのその答えを聞いて彼は泣いた。せめてこの気持ちを分かち合いたい。そう思うと彼はますます孤独を感じた。

二日間、彼はお婆ちゃんの死体の前で座りつづけた。

三日目、役所から見回りの職員がやって来た。

「お婆ちゃんは元気ですか？」

「あ、はあ……」

「上がって良いですか？」

「いや、今は眠っていますので……」

「じゃあ、また日を改めまして……」

役所の職員が帰った後、彼はゾツとした。

彼は三十年引き籠り生活をしていて、お金の稼ぎ方を全く知らなかった。

受給されるお婆ちゃんの年金のみで暮らしていた。

お婆ちゃんが死んだ事が知れたら、年金は貰えなくなる。そうしたらどうやって、生活して行けばいいのだろうか？

彼は頭が真っ白になった。そして、

「僕が直す……」

お婆ちゃんの死体を見つめながら、彼はロボットの言葉を真に受けはじめていた。

夜中になり、彼はお婆ちゃんの死体を背中に背負い、山に登った。

二人でよく星を眺めた場所にお婆ちゃんを埋めた。

「オリオン座が綺麗だよお婆ちゃん。」

次の日から、ロボットを改造した、お婆ちゃんロボットの制作が急ピッチで行われた。

死体から採ったお婆ちゃんの型を元にして、骨格から、シワまで細かく再現した。何せこれからの生活がかかっているので神経質ぐらいに再現に勤めた。それはもはや、現代科学の最高峰を数倍超える技術であったが本人も含め、誰もその事を気づいてはいなかった。

体内にはコンピューターらしき機械が見つかるかとロボットだとバレると怯え、内臓から、血液、髪の毛まで伸びる装置を搭載した。

上半身が出来上がった時、一度役所の職員が見に来た。

「どうも、お婆ちゃん。元気ですか？」

半ば強引に入り込んだ職員に、ロボットお婆ちゃんを見られた時、布団を被せ下半身を隠したが、息が止まる程、緊張した。

「すみません、寝たままの姿で…」

「いえいえ、また来ますからね」

それから、約二十年彼はお婆ちゃんを補強し続けた。世界一長寿と認定され、マスコミの取材も沢山来たが、誰もロボットだとは気づかなかつた。

いくらかのテレビ出演を経て、沢山のお金が手に入り、彼も老人と呼ばれてもおかしくない年齢になった。

「どうだい、幸せかい？」

ある日、お婆ちゃんロボットが彼に聞いた。

「うん、お婆ちゃんとも一緒にいれたし、君は何より最高の友達だった。」

彼はお婆ちゃんと、友達を同時に手に入れた喜びを実感していた。

「そろそろ、死のうかと思うんだけど、良いかな？」お婆ちゃんロボットは、彼の技術のお陰で老化現象まで引き起こしていた。もう、身体が限界だと言う。

「そうか…。疲れたよねお婆ちゃん。」

「もう、やり残した事は無いかい？」

「やり残し…」

彼は流れ星に乗りたいと思ったあの日を思い出した。

それから数日をかけお婆ちゃんロボットを改造し、空を飛べるようにした。

そして、お婆ちゃんの中に入り、最後の旅に出る事にした。

彼は思う。星を眺め、いつも思ってた。引き籠りの自分から抜け出したかったんだと…。

「幸せだったよ。誰が何と言おうと。」

世間は唐突に消えた世界一の長寿お婆ちゃんについて騒いだが、そのうちみんな忘れた。そして二人が見つかる事は無かった。

ただ、偶然なのか、二人が消えたと言われた日から、夜空には流れ星を見たと言う報告が多数あったと言う…。

(後書き)

なんなんだこの話…(…)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8219z/>

老人かロボット。

2011年12月26日01時50分発行